

文月や星逢う夜の・・・

西松 布咏

七夕が近くなると「文月や 星逢う夜の天の川 笹の露さえしつぽりと」と恋を夢みる乙女のように声を高く張り上げ唄う。いつものように一年ごとに巡ってくる季節により添って唄うと七月七日によやく逢える彦星と織姫のドラマがあざやかに心に甦ってくる。

一説にはこの二人は仲睦まじく結婚生活を送るがゆえに仕事を忘れてしまった夫に、怒り心頭の織姫の父親は二人を離し、年に一度だけ逢瀬を許したとある。若い頃は、可愛そうな二人！と大いに同情したもののだが、江戸唄を唄うようになってからは、巡る月日の寂しさを我慢すれば必ず逢える二人はなんて幸せ！に変わってきた。

人間は思うようにならぬから努力し、その想いは持続し明日に向かおうとするのではないか。事足りてしまつたら想いも恋も終わつてしまうのでは・・・。未だに納得のゆく芸域に到達出来ぬ伝統音楽の、遠くて深い川に浮きつ沈みつしているわが身に置き換えてしまふ。そんな思いを抱きながらも、芸を続けしているからこそその素晴らしい出会いや幸せな瞬間が訪れてくれる。

この春もそんな瞬間がいくつかあった。

如月の梅かほる頃、池上実相寺で「文楽と江戸唄りミックス」共演をしたが、その折に文楽人形の白い横顔が忘れられない・・・との声が多かった。私は懸命

に人形の心に届くようにうつむいて唄うばかりだったので、今度は客席からその顔を観たいと思っていた。はからずも岐阜の出稽古最終日の五月三十日、市内から車で一時間半ほどの山間に佇む美濃歌舞伎博物館（相生座）で文楽公演を観ることができた。明治二十七年建立の芝居小屋は新緑に包まれ、青空に幟旗がひるがえり、久々の出会いに心が躍った。

最後の演目「菅原伝授手習鑑・寺子屋の段」は豊竹嶋大夫の熱い語りと相まって、桐竹勘十郎の松王丸・その妻の千代を吉田蓑助が淡々と演じた。恩と忠義の狭間の中で、我が子を主君の子息の身代わりにせざるを得なかった悲しみを見せまいとすればするほど人形の横顔は凛と舞台の空気を引き締める。熱気に覆われていた客席は、互いを気使う夫婦の一挙手一動に息をこらし、小さな座布団に座った足の痺れをも忘れた拍手のなかで涙が溢れた。幕が下りる寸前の勘十郎のすつと伸びた背中で哀しみを秘めた蓑助の小さく丸まった背中の対比が今でも一幅の絵のように熱く甦る。

その夜は近くの鬼岩温泉に宿をとり川のせせらぎのなかで湯につかりながら、大阪での再演がかない、この秋に文楽人形と再び逢える幸せをしみじみ思った。

翌日は多治見に程近い駄知町に寓する陶芸家安藤實氏と三年ぶりにお会いした。氏との出会いは奥深い多治見に民家を移築した「ももぐさギャラリー」。闇に揺れるろうそくの灯りのなかで催した【夜の愉しみ】のひとつときであった。座敷には上がらず庭の一隅で髭をたくわえた寒山拾得の仙人よろしく「ええ声じゃねえ！」と煙草をくゆらしていらした。

時折下さる絶妙の筆文字と絵手紙でそのお人柄には馴染んでいたものの、長い空白の年月は埋まるかしら・・・と案じたのはほんの束の間。無造作に心む作品が散らばっている工房で、自分につぶやいているような穏やかな語り口はあの時と同じ。昨夜宿の枕元で聞いた



川のせせらぎのよう。止め処もないおしゃべりは、まるで憂き世を離れた四畳半の小唄の世界のよう。地位も名誉もお金もないのは気楽でいいよ・・・自然の中で遊ぶのが一番！そう仰って軽やかに墨を摺り、すらすらと私の所望した色紙を書いて下さる。気に入ったものがあつたら持つてゆきなさいの声に躊躇しながらも私の手は、ちよつと重いほつこりした壺をしっかりと選んでいた。今では稽古を終えほつと一息する部屋にすっかり馴染み、至福のひとつときを思い出させてくれる。今度はいつお会いできるかしらと想いながら・・・。

六月二十五日「第四回徳川大学伝統文化講座」出演を依頼された。

高崎線深谷駅から利根川を渡り左右に田畑が連なる道を車で二十分ほど走ると、黒い大木戸門が立ちふさがり、その奥に鎮座する満徳寺本堂で「水無月の宵に唄ふ」と題してお喋りを交えながら演奏した。

館長の高木侃氏とは今をさかのぼること十六年前、黒川紀章氏提唱の「日本文化デザイン会議 in 福岡」のパーティでお会いして以来の再会である。高木氏は法学博士で三下り半の研究者、テレビやラジオ出演、執筆活動と八面六臂の活躍の傍ら専修大学教授として上京すると伺い「今度ゆっくりお会いしましょう！」とお互い言い続けながら十六年の歳月が流れた。その再会が江戸幕府公認であった縁切寺での催しとはいささか皮肉なことではあったが、その日は柔らかな笑顔での再会となった。「少しも変わられていませんね！」と見交わす顔をなでる夕風に紫陽花の花びらが少し揺れていた。

紫陽花の色に染まるや三味の音、その夜の公演はすこぶる好評だったようで又来年も・・・の思いがけないお約束をいただけた。まさに、夏の涼みは：上がる流星・星下り玉屋がとり持つ縁かいな、である。

唄い続けていると「星逢う夜の天の川」のように嬉しいひとときが訪れることもある。また、耳を澄ませ三味の音と共に来年の七夕を待つことにしよう。



## 三味線との出会い

相馬 由紀子

先日、歌舞伎座で『助六』を観ていたら通人役の勘三郎が舞台上手から「よぎあくくらアアアア」と鼻歌を唄いながら登場した。「あー」数日前に布詠先生に唄って頂き練習を開始したばかりの『夜桜』だった。

子供の頃から歌舞伎が大好きだった。といっても能登の田舎育ち。観劇はもっぱらテレビの舞台中継で、生の舞台を観ることができたのは成人してからのこと。東京へ来てからは夫も巻き込んでたまに歌舞伎見物を楽しんできた。

その歌舞伎、以前にも増して好きになっていく。理由ははっきりしている。布詠先生のところでお稽古をするようになったからだ。「今の台詞、あの唄の中の！」「この人、唄に出てきた！」「あの三味線の音！・・・色々な発見があり、そのたびに興奮した。そして、今まで『見て見えていなかった』モノが一つの舞台の中に膨大にあるのだということに気づかされた。すると、今まで見過ごしてきた小さな一つ一つの場面・人物・台詞・音楽が生き活きとし始め、総体としての見事さに圧倒された。また、長い年月をかけて唄を芝居を創り演じ、それこそ血のにじむ修行をして大切に伝え続けてきたであろう多くの人たちの歴史に畏怖に近い感動を覚えました。

十年ほど前、太鼓仲間のNさんから三味線を頂いた。当時七十九歳のNさん、六歳から三味線のお稽古に通っていたという。歌舞伎の話などをしていくうちに「家じゃわたしつか弾かないし、三丁あるから一つやるよ。」遠慮している暇もなく三味線を持ってきてくれた。初めて触る三味線、何とか弾いてみたくて本で調べたりワークショップに出かけたり民謡教室に行ってみ



たり・・・そうこうしているうち、古い知りあいのMさんから思いがけない話を聞いた。「僕、端唄のお師匠さんの追っかけをやってるんだよ。」

恐る恐る布詠先生のところにメールを入れたのはその一年後。稽古場を訪ね入門させて頂いた。あれから二年。

四月三日、四度目の美紗の会は忘れられない会になった。もちろん、自分の出番はこれ以上ないほど緊張し（声も手も震えているのが自分でも分かった）無我夢中で唄い演奏し、それはとても良い経験だったと思う。

でも、それよりも何よりも聴くのが楽しかった。唄を聴きながら色々な物語を登場人物を思い浮かべた。芝居を観ているような、とても幸せな時間だった。

そして布咏先生の演奏は・・・息の詰まる思いで聴いた。これより早くても遅くてもダメ、まさしく「今、というタイミングで響く三味線の音。唄に寄り添うように、励ますように、ささやくように、明るく、切なく、凜と・・・一つの音も聴き逃したくなくて耳を澄まし続けた。息苦しささえ覚えながら聴くのを楽しめることができなかった。

最近よく夫に冗談めかして言う。「私、生まれ変わったら六歳から三味線習うの。」もう少し早く出会っていただかつたなあと時々悔しくなる。でも、もしかしたら今だから良かったのかもしれない。今だからこんなに好きに夢中になれたのかもしれない。そう思い直すことにした。今、ここが出発点。少しずつ一歩ずつ、布咏先生や先輩方の後を追いかけて、少しでも近づいていきたいと切に思う。この素晴らしい世界に出会わせてくれた人たちにも心から感謝しつつ・・・。

## 見えないものを求めて

針谷真紀子

「お稽古をはじめたの。なんだと思う？」最近、同僚や友人らと飲みに行くたびに必ずする質問。未だ、正答者はいない。

「ピアノ？バイオリン？」「まあ、糸つながりではあるけど、ね。「フラメンコ」？サルサ？」「いやいや。「射撃？格闘技？」「格闘系アスナなら、やってます。「ヨガ？ピラティス？」「それも必要・・・クールダウン足りないのだよね。「お茶？お花？」「和ものつながりですね、もう一声。「日舞？お琴？」「あ、ちょっと近づ



いてきたかなあ。」  
 日常の私のイメージからそれほどかけ離れていると、いつことなのでしょう。むしろ、「真逆」といっても良いくらい。目の前を通り過ぎていく文書・画面はほとんど英語。重要な会議は英語がメイン。だからこそ、早く帰れた日は、うっとり師匠のお手本を聴きながら、糸にふれ、唄を口ずさむのが心の慰めとなっている。もともと、日本の文化に広く浅く興味があったが、一つのこと打ち込むところまではいかなかった。お稽古をはじめようと思ったのは、師匠との出会いのおかげ。

そのきっかけとなってくれた御妹君にも心よりの感謝をお伝えしたい。

邦楽との最初の出会いは、母の爪弾く琴の音色。その次は、小学生の頃に参加した子供会の獅子舞練習会だった。獅子舞の笛の練習には、五線譜のような楽譜はない。全て口伝による。ピアノのレッスンの方を先に始めた私にとっては、「楽譜はどこ？どうやって音を確認するの？」と得も言われぬ違和感をただただ、感じるばかりだった。見えない楽譜。「トコロリーリヤリユリヤ」という言葉が唯一の音を表す指標だった。世代をつなぐ口伝の笛の音。見えないものを語り伝えていく大人衆。それを受け継ぐ屈託のない子供衆の笑顔。子供衆の一人だった私は、最初に感じた違和感をずっと心の中にとどめたまま、毎年、獅子舞奉納の二カ月前からの練習会に参加し、卒業と共に、笛の音を忘れ、いつしかそのとき感じたあの違和感も忘れ去っていた。

六月も半ばの少し蒸し暑い日曜日、母が上京し、「着付け教室」を開催してくれた。娘が着物を着る機会を得たことを一番喜んでるのは、母かもしれない。自分で着られるようになりたいという娘の願いを叶えるべく、懇切丁寧な指導をしてくれる。そんな時、母がふともらした言葉が、すうっと心に沁み入った。「着物を着る時にはね、見えないところの手の動きが大事なの。」見えないところ、三線譜では表現できないところがあるんだ。ふと、お稽古を始めてから感じていること、いつかそれを心底わかるようになっていくという想いと、その言葉はつながった。口伝の笛の音。忘れていた子供の頃に感じた違和感・・・絡まった糸のようだったあの感覚が、するするとほどけて、いつしか、絹の糸となり、師匠の手ほどきを受ける三味線の糸へ、唄へとつながって行く。「見えないものを見る」のはいつの日か・・・長い旅は、始まったばかり。

## 縁を切る

飯名 尚人

縁を切る。と聞けば誰しもあまり良い感じはしない。西松さんが「縁を切る寺」で演奏するというところでビデオ撮影に伺った。この縁切寺とは通称で、正式には満徳寺という利根川沿いにある寺である。この寺は江戸時代、離婚したい女性が駆け込んで絶縁状＝三行半を代筆してもらったり、二十五ヶ月間寺に住めば離婚できるといった機能を持つ避難所である。現在の簡易裁判所であろうか。併設の資料館は興味深く、単なる歴史紹介ではなく当時の離婚に関する法システムが詳しく説明されている。資料館館長でありこの演奏会の企画者である高木侃氏は、法学博士で三行半の専門家なのである。それにしてもこの辺鄙なところ（群馬県太田市。夜になると現在でも真っ暗）に「助けてください！離婚したいんです！」と駆け込んでくる女性は



さぞかし切実だったろう。と同時にどこか滑稽に扱われ「あそこの奥さん、縁切寺に駆け込んだらいいわよ。おほほ」と主婦の井戸端会議で盛り上がる滑稽ネタでもあったらうと想像してしまう。

この縁切寺本堂での西松さんの演奏は、男と女の切実さと滑稽さを盛り込んだ楽曲の数々で会場を盛り上げた。曲間にはすべてご本人による曲の解説と現代の時事ネタがうまく盛り込まれ、会場からは笑いが絶えない。地唄や端唄の印象は、事前に唄の意味や歴史などの知識がないと楽しめないというイメージだったが、西松さんの演出は僕のような素人にも親切なエンターテインメントとして構成されている。配布された歌詞を見ると、どの唄も江戸時代の色恋モノであり、当時は娯楽として聴いた楽曲であるようだ。江戸時代に娯楽として楽しんだ演奏を、同じような居心地で聴くことができるわけだ。ところが一旦演奏に入ると、そのシャープで透き通る声と弦を弾く緊張感はものすごい。八曲目で休憩があり、ふと外を見ると空が藍色になっている。後半四曲の演奏が始まるころには外は真っ暗。この本堂だけがフッと浮き上がって見え、無意識に集中力が増し、演奏に視線と耳が釘付けになる。演奏が終わるたびに客席から「んんん」と深い溜息というか唸りというか、そういうのが聞こえて来て、一曲ごとに拍手が湧く。滑稽さから、いつしか切実さに変わり、さらには縁切寺に駆け込んだ女性が尼僧となり夫との縁が切れるのをあと一ヶ月、あと一日とじっと待つ静けさとその日が過ぎることに生まれるであろう高揚感。本堂全体に音が細かく振動して、そんな空想的な感覚が増幅される。演奏ではマイクを一切使わなかったたので、声と三味線の音が本堂全体へ本当に良く響いた。こういったショーを「伝統芸能」と一括りにしてはいけない。非常に現代的で先駆的、普遍的なエンターテインメント・ショーなのである。

### 《今後の公演予定》

平成二十二年十月二日(土)午後二時開演

軽井沢 鶴間邸  
第三回 薊の会

秋の月によせて

唄・三味線 西松 布咏

尺八 小林 純平

お話・朗読 寺田 農

平成二十二年十一月六日(土)午後一時開演

赤坂・泉くらぶ

第四十回 美紗の会のつどい

美紗の会 一門演奏会と親睦の夕べ

平成二十二年十一月二十六日(金)午後七時開演

大阪 山本能楽堂

貞女の夢・儂

文楽X江戸唄リミックス その2

文楽人形遣い 桐竹 勳十郎

唄・三味線 西松 布咏

鶴沢 清志郎

豊竹 咲甫大夫 他

### ■たより第66号

発行者 美紗の会

編集責任者 大久保 朋子

デザイン 近藤 幹則

■美紗の会

主宰 西松 布咏

稽古場 港区白金台三・一・二

白金台ブレイス三階

電話 (三四四一)二七二六

(五四四七)二四一一

E-mail: nfu@soleil.ocn.ne.jp

URL: http://www17.ocn.ne.jp/~misa5/

